

## 80年代の小説にみる中国社会の問題点 その五

堀 黎 美

### Retlex of Chinese Social Problems on the Contemporary Chinese Literature Part 5

Reimi HORI

“Chinese People’s View on Education”

More than ten years have passed since Great Cultural Revolution ceased after completely exerting persecutive and destructive influence over the intellectuals and educationists. Yet china can not be free from the after-effects of the revolution.

I would like to look at the changes that happened since then and the status quo of the educational circumstances and people’s view on education in China.

#### 中国人の教育観

ここ数年間に各種の賞を得たり、優秀作、佳作集に編まれる作品の中で、教育問題を直接の主題としたものはそれほど多くはないが、中国社会における教育の地位や、抱えている問題をうかがい知る一端とはなると思う。特に、知識人や教育者に対し徹底して迫害、破壊をしつづけた文化大革命が終って、すでに十有余年経過しているにもかかわらず、いまだにその後遺症を脱却できるに至っていない状況、昨年の六・四天安門事件後、鄧小平が言ったと伝えられる「これまで学生への教育が足りなかった、学生を甘やかすすぎた」との発言に見られる教育観とはいかなるものであるのかを、いくつかの作品から考えてみたい。

最初に、時代は少しさかのぼるが、たまたま都会と山村の文革末期から終了直後のほぼ同じ時期、同じ学年を描いた二作品を。前者は1976年1月中の約2週間、山村の中学校におけるある体験の記録（発表は1985年頃）。後者は1977年初春、都会の中学校での1日のできごとを描いたもので（発表は1978年）、両作とも読者の大きな反響を呼んだ。この二作から、舞台となった1年有余の間の教育観の変化、及び発表時期の差約7年間の教育観の変化を眺めてみる。

## 孩 子 王

阿城著 約2万6千字

1976年当時、私はすでに生産隊にて農作業に従事することすでに7年に及んでおり、作業はひと通りこなしてはいたものの、からだが弱いせいもあり万事他人に遅れをとっていたのだが、自力で食べていけさえすればそれでよいと思っていた。

1月のある日、生産隊（人民公社の下部組織が生産大隊で、その下が生産隊）支部書記（支部の責任者）から呼び出しがかかり、何か失敗をしたのかと恐る恐る行ってみると、いきなり「明日から学校に行って生徒達に授業するように」と言われ、驚きつつも（農作業を離れられるのを）喜んで宿舍に帰り荷物を整理していると、日頃親しいなかま達が集まって来、「先生になったからといって僕らを忘れるなよ。これから会議や映画会の時に学校を通りかかったら、寄っていくからな」「中学4年（初級中学3年卒業後、更に高級中学つまり日本の高校に1年通ったことを意味する）まで行った者はやっぱり違うわ」などと言いながら送別会を開いてくれた。まるで私が連合国に駐在するか月にでも行くかのようなさわぎで、私もなごりが尽きない思いであった。隊の炊事係来娣もやってきて、思いをこめた目で私を見つめ「本当に残念だわ」というので皆が笑った。彼女は少し怒っていった。「私のこと、炊事だけしかできないと思っているのかしら？私は楽符も読めるし歌も上手なのよ。学校でだって教えられるわ」それからまた皆で楽しく酒を飲んだ。

夜が明けると、霧の中を服装を整え荷物を持って出発した。同室の友人老里もふとん包みや洗面器などを背負って同行してくれた。生産隊から約10キロの山道を1時間ほど歩いていくと学校に着いた。いくらかどきどきしながらわら葺きの教員室に入っていくと、老陳という男と教師らしい女が二人いた。老陳は「数日前に教師が一人転勤してしまい代講する人を探していたのだが、村中の知識青年（中学を卒業して進学や就職がきまらずにいる青年）のうち、君だけが高校に通っていたことがあるそうだから来てもらった」と説明し、私は「高校とはいっても1年行っただけだし、教職の経験ありませんから」と言ったが、老陳に「誰だって最初から教えた経験のある人間はいない」と説得されてしまう。教員室の窓から大勢の中学生が私を見つめており思わず赤面する。老陳が宿舍にも案内してくれる。

老里に手伝ってもらって、そのオンボロ宿舍で何とか暮らせるように午前中いっぱい掃除をし、午後からすぐに教壇に立つことになった。老陳が渡してくれたのはボロボロの教科書とチョーク1箱、赤青のインク各1瓶、ペン1本、ノート1冊。「教科書はなくさないように。なくすとかわりがない」と老陳が言ったが、この汚い教科書では病気が伝染しそうな気がする。ほかに時間表も渡される。私が担当するのは、えっ！中学3年生？私は高校に1年行っただけなのにどうして中3を教えられるのだ？改めて言葉を尽して辞退したが「じゃ誰が教えるのだ。私は小学校しか出ていないからもっと駄目だ。ここの生徒は高校に進学するものもないし、やってみてくれ。やればやれるさ」と押しきられてしまう。女教師達も「私たちだってだめだけれども何とかやってきたのよ、心配しないで大丈夫よ」という。

老陳の案内で暗いわら葺き屋根の建物の前に立った瞬間、まるで就役するような気がした。老陳の紹介と注意のあと私が教室に入っていくと、たちまち「起立！」の号令のもと、机や椅子をガタガタさせて皆一斉に立ち上る。続く号令でまたガタガタ腰をおろす生徒もいるし、つつ立ったままの人もいる。立っている生徒が「先生が腰をおろさないのにどうしてすわるんだ！」というのと、また全員ガタガタと立ち上った。私が「着席！」と言うと皆笑ってすわった。

黒板の前に立ち、咳払いをしてから生徒に向い「きみ達第何課までやったのだ？」と言ってしまってから、これは教師が生徒に聞くことではないなと思った。「第一課が終って第二課から」との生徒達の言葉に従い「では皆4頁を開けて」と言ったが、生徒はじっとして何の反応も示さない。もう一度同じ言葉をくり返したがやはり反応がない。近くにすわっている生徒に「本は？出して4頁を開きなさい」と言うのと「何の本ですか。本なんてありません」他の生徒まで口々にそう言いだした。私は少し腹が立って「本がないって。学校へくるのに教科書を持ってこないなんてどうやって勉強するのだ。級長は誰？」というのとやせて赤茶けた髪の少女が心配そうに立ち上った。「教科書ないんです。授業の時は李先生が教える分だけ黒板に書いて、それを私達がノートに写しました」私は呆れて学校が教科書を渡さないのかと聞くとそうだという。何ということをと驚いてすぐ老陳を探しに行き問い質した。老陳は笑って「ああ、忘れていた。君にいうのを忘れていたが教科書はないんだ。こんな田舎は本を予約して県まで受け取りに行くのだが、しょっちゅうないんだ。皆に行き渡るほど印刷できないんだそうだ。ほかの学年もだいたい写させている。ここは大都市とは違うんだよ」とのこと。私はとてもふしぎな気がした。「国がどうして印刷できないのですか、紙はたくさんあるのに。生産隊にだって批判やら、学習の材料とやらがあんなにいっぱいなのに、どうして教科書の印刷ができないんです」というと老陳は「よけいな事は言わないように。大批判は手を抜くことのできない国家の大事だ。教科書の印刷が足りないのは、つまるところ国家が困難している訳だから、我々は写すことによって困難を克服すべきじゃないかね?!」私は失言を悟った。

教室に戻ると第二課の課文を黒板に書き、生徒はおとなしくそれを写しはじめた。牛の飼育より楽そうだった。一段落写し終え、解釈しようと咳払いをした時、突如隣室から大きな歌声がとどろき渡った。当時もてはやされた歌で、まるで言い争ってでもいるかのように屋根のわらまで震動している。隙間からのぞいてみると、生徒が退屈しているので女教師が気分を一新するために皆に歌わせているらしい。やむなく歌声が終るまで待ち、続けて説明しようとした時終鈴が鳴り、「起立！」ガタガタガタ……のあと、生徒は先を争って出ていった。すぐに開始の鐘が鳴り、つぎの時間も生徒はひき続き写している。無聊を感じた私は誰もいない校庭に目をやると仔豚が走り来り走り去ったあと、雌鳥が餌をついばみにやって来、続いて雄鳥が雌鳥につきまとい、興味を感じて観察していると、「写し終わりました」と生徒の声があり、「まだの者は急ぎなさい」などと急がせて、再び校庭に目をやった時にはちょうど番い終ったところで残念だった。

全員写し終えたようすに、「では、どういうことが書かれているのか」と質問してみたところ誰ひとり答える者がいない。もう一度質問を繰り返したがやはり答はない。「ある村の物語だっ

ことははっきりしているだろう。それも分らないのか」生徒達は依然として黙ったままだ。「あれ、おかしいな、何年も勉強しているのだからこれくらいは読めて当然だろう。じゃ君、言ってごらん」適当にあてた男子生徒がもじもじと立ち上り、私と黒板、他の生徒を見くらべ、ちょっと笑うと「分りません」と言って着席した。「立ってろ。こんなはっきりした話がどうして分らないのだ。阿呆でもあるまいし」その生徒はいくらかきこちなくまた立ち上り、急に言った。「先生が何を教えたいのか僕も知りたいんです」皆が一斉に笑って私を見た。「ある地主が破壊をたくらんだが、貧農・下層中層農民らにつまみ出され、そこでその村の生産が高まった。という話のどこが分らないんだ、それ以上何を教わりたい？えっ？」私はつぎに級長を示した。彼女はゆっくりゆっくり私の言った言葉を思い出しながら反復した。その時、後方の生徒が突然大きい声で言った。「先生はいったい何を考えているんですか。こんなやり方見たことない。教えるべきことをちゃんと教えて下さい。まず分らない字を教え、つぎに段落のわけかた、段落の大意、主題となっている思想、作文。暗記する箇所は暗記させ、宿題に出すところは出す。僕だって教えられます。先生はきっと生産隊での仕事がだめだからここに回されてきたに違いない。」私は一瞬呆然としたが、近くの生徒に彼の名前を聞いて言った。「王福、君が教えられるというのなら、ちょっとやって見せてくれないか」「先生は僕を懲しめるんですか」「いや、そうではない。僕はけさここへ来て授業の前に教科書を受けとったばかりだ。つまりこの本だ。うち明けた話僕は字はたくさん知っているが、教壇に立った経験はない。だからやり方が分らないのだ。李先生がどういう風に教えていたのかやって見せてくれないか」「僕だって本当には教えられません」「こっちへ来て黒板の前で言ってみてくれ。最初に、まだ習っていない字はどれなのか。君たちはこれまでにどのくらい字を習っているのか僕には分らないから」王福は貧しげな服装でとても大きな手足をしている。彼は分らない字の下に線を引くと席に戻った。すると他の生徒もつぎつぎに出てきて線を引いた。ざっと見たところ課文の3割が分らない字である。私は笑って言った。「どうやって中三まで勉強して来たのかな。道理で課文の内容が分らない訳だ。このうちの半分は小学校で教わっているはずだが」王福が言った。「僕が線を引いた三つの字は今まで教わっていない字です。僕は証明できます。」私は黒板を見ながら「こうしよう。線を引いた字を私が教えてから、本当に新しく出てきた字を調べよう」というと生徒は全員うなづいた。一字一字教えているとまた違う教室が大声で歌い出し、間もなく終了の時間だと知った。そこで私達も全員声を揃えて歌を歌い授業を終えた。

教室を出ようとする王福がそばにやってきて、これまで習った字は全部ノートに整理してあるという。そのノートを見た時、王福が王七桶の息子であるのを知った。そして以前隊の食料運搬のためトラクターに乗って町へ出た時一緒だったおしの王七桶が、字引を探していたのに手に入らなかったことを思い出した。「君のお父さんを知っているよ。とても働き者だね」と言うと王福は少し顔を赤らめたが何も言わなかった。教員室に戻って老陳に「この教科書には教えかたの基本はないのですか。やはり勝手にやるわけにはいかないのではないですか。これが全国統一教材ならば当然指導書があるはずです。どこにあるのか教えてくれたら写してきますから」と聞

くと「それは難しい」との返事。「それならば私のやり方でやりますよ。規格に合わなくても知りませんよ」というと、老陳はため息をつき言った。「そうしてくれ。規定では18才にならなければ仕事につけないし、お金ももらえない。この子供も仕事がないのだからここで勉強することはやはり好いことだ」

このような経過を経て授業はしやすくなってきた。王福が見せてくれた、これまで習った3888字をきちんと整理しているノートが本当に役に立った。国語の授業にはもちろん作文もある。はじめの頃は経文のような文字を読み解くのに夜中までかかることもあった。どれもこれもひどく短く、そのうえ判で押したような内容である。私は生徒にまず字をはっきり書くように、そして“紅旗はためき、戦鼓天を震わす”といった類いの、きみ達の生活に関係のないきまり文句を使わないこと、と約束させて自由題で書かせてみた。最初に書き上げたのが王福。

僕の家には時計がない。僕は朝起きると、僕は服を着て、僕は顔を洗って、僕は台所へ行って食事する。僕はご飯をたべると茶碗を洗い、僕はカバンを持つ。僕は時計がない。僕は長いこと歩く。山には霧がある。僕は学校について、僕は着席して勉強する。

私は「うまく書けている。まず誤字がなく、字がはっきりしている。第二に内容がある」そこで読み上げると皆笑い出した。「笑うな。この作文は“僕”が多すぎる。一度言えば皆に分るのだから何度もくり返さなくともよい。句読点多すぎる……」などの注意をした。

こうして教科書を離れて授業をするようになって半月、毎日字を教え、文を書かせた。生徒達は徐々にあせり出した。その時ちょうど学校行事として、建物の修理のために山から竹を切り出してくる作業が行われることになった。その仕事をめぐり、王福と私は級友を証人にして賭をした。つまり翌日の作業の内容を王福が前日作文に書いておく。翌日その通りだったら、私が来娣からやっと手に入れた新華字典を彼にやる。この賭に王福は勝てなかったが、それでも私は字典を彼にやろうとした。彼は「自分が負けたのだから受けとるわけにはいきません。そのかわり放課後毎日写させてほしい」といい、それから毎日実行した。

巡回映画が上映され、以前の生産隊のなかま達が学校を訪れ楽しい一夕を過ぎた翌日、たまたまた作文の時間で皆が一心に書いている時、昨夜来娣達と作った歌のことを思い出して「今日、放課後歌を教えてあげよう」というと皆喜んだ。ふと窓の外を見ると、老陳が見知らぬ人とこちらを眺めながら事務室に入っていた。王福がまた一番さきに書き上げた。

#### 僕の父

僕の父は世界一の力持ちだ。生産隊で麻袋を担ぐ時、誰も父にはかなわない。僕の父はまた、世界一ご飯をたくさん食べる。母はいつも父に腹いっぱい食べさせる。これは正しい。なぜならば父は働かねばならないし、父の働いたおかねで一家を養っているからだ。しかし父は「おれは王福にはかなわない。王福は字が読めるから」という。父はおしであるが僕は父の気持がよくわかる。生産隊には父をばかにする人もいることを僕は知っている。だから僕はよく勉強し、父のかわりに話したい。父はとても苦しい。今日は病気なのにゆっくり起き上って仕事に出て行った。今日の収入を失うのを心配して

である。僕は学校に来なければならず、まだ父に替わるができない。朝、白い太陽が顔を出し父は白い太陽に向って山の上を歩いていった。僕は思う。父は本当に力持ちだ。

私は呆然としてしばらく王福の方を見ていた。

授業が終り、作文を集めて事務室に行った。老陳が「こちらは教育科の呉幹部だ。君に話があるそうだ」と紹介し、それから二人はおたがいにどちらが言うかでゆずり合った結果、「当方の意見としては、君を再鍛練することにした。自分の希望する生産隊に行ってよろしい」

私はすべてを悟った。「もとの生産隊に戻ります。この生徒達の作文は持っていきます」

あくる日早朝立ち去る時、新華字典をとり出し「王福に贈る。来娣」そして自分の名前も書き加えた。

孩子王とは子どもの王様の意味で、他にも小、中学校の先生をそう呼んでいるのを見たことがある。日本語訳された中には「青年教師」という題にしているのもある。

この作品を最初に読んだ時、筆者は1979年春中国で日本語を教え始めた頃のことを思い出した。文化大革命後第一回目の入学試験を通して入学した学生は非常に熱心で、その意味で筆者は幸福な教師であったが、授業し出すとすぐ、中国の学生に共通する特徴に気づかざるを得なかった。学生達はその日に教わった課文をすべて暗記するせいか、発音練習から始めて半年余にしてはよくぞこれほどと感心するほどであったが、少し内容に立ち入って質問すると答えられないのである。理解できていないというよりか、そういう方向に物事を考える習慣がなかった。一例を挙げると、A、Bが話をしているBが「うん」と返事したとする。この時Bはどんな気持ちで「うん」と言ったかたずねても答えられない。「うん」という返事は「はい」よりもていねいでないことは知っているが、「うん」と答えたBが喜んでいるのか、いやいやか、無意識か。A・B両者の関係はどのように推測できるか。というようなことに思いを致す習慣はなく、字面の解釈だけしていたらしい。外国語での表現能力の限界からではないらしかった。だから教科書中に「社会主義国には公害というものがありません」という例文が出てきても「果してそうだろうか」などとは絶対に思わないのである。(たまたま武順、鞍山を旅行して空気の悪さに窒息しそうな思いで戻ってきた筆者は、この例文をどうしてもそのまま看過し得ず、後にその例文は削除されたけれども)

つまり教科書に書いてあることを金科玉条として、ただ暗記さえしていればよい先生、よい学生であるという教育がずっと行われてきたのである。だから孩子王の私が、転任した李先生のように授業していたならば「密告」されることなく続けて教壇に立っていられたであろう。このあたりのことは作中にも友人たちの話題として出てくる。

——誰かが言った。「中三の学生はおれ達より沢山字を知っている。だけとおれ達を使いこなせないように、彼らにもさき行き役に立つとは思えない」「こんな所では字を覚えて手紙が書け、新聞が読め、批判文が書ければそれで十分よ。しきたり通り何年も勉強する必要なんてないわ」と来娣が言った。老黒は「はっきり書けない。読んでも分らないのを心配しているんだ。少し前

にトランジスターラジオで文盲について話しているのを聞いたよ。つまり字を覚えてだけではやはり文盲だ。読んで理解し、多くの意味がはっきり分かって、やっと文盲ではなくなるんだ」皆驚いて疑わしそうに言った。「それはおかしい。文盲一掃班すなわち識字班じゃないか。字を覚えれば文盲ではない。おれ達全員知識青年じゃないのか」私は考え考え言った。「字を知らないのは多分文字盲で、読んで理解できないのは文化盲だ。老黒はそれを聞いて道理があると思ったんだ。けれど皆はそういう風に分けて言ってはくれないから」老黒が言った。「もちろんだよ。あれは英国の中国語放送で、話しかたがはっきりしていた」皆が笑い出した。

つぎに、時期的には孩子王より一年余あとになるが、発表は1978年にされた同じく評判作、班主任（クラス担任）を見てみよう。

## 班 主 任

劉心武著 約2万字

あなたは、チンピラと知りあいそして毎日つきあいたいだろうか。私が思うにそんなことは望まないばかりでなく、変なことを聞かれると不思議に思うだろう。しかし光明中学党支部書記（学校の最高責任者）老曹が信頼しきったまなざしで、期待と激励をこめて「どうだね、宋宝琦を引き受けてくれるだろうね」と訊ねた時、初級中学3年3組の担任張俊石先生は、一分間ほどまじめに考慮したあげく「結構です。お引き受けしましょう」ときっぱり答えた。

数日前、公安局がグループ非行で拘留していたチンピラ、宋宝琦を釈放した時、拘留中の態度とまだ16才という年令に鑑み彼を釈放して教育することにし、両親も彼のために家を光明中学の近くに移転し、光明中学3年3組に空きがあったのと、張先生が十数年にわたるクラス担任の経験を持ち、学年唯一の共産黨員であるため彼のところに回って来たのである。直接具体的な状況を聞くために訪れた公安局から出てきた張先生の表情は、説明しにくかった。憤慨しきっている訳ではなく、嫌悪と軽蔑をまじえながらも、徐々に決意を固めつつある様子の中に心配や負担感も見えてくる。3時すぎに教員室に戻ってきた時、同僚達は皆あすから宋宝琦が登校してくることを知っており、宋宝琦をめぐる最初の波瀾があったのは、尹先生が張先生を迎えた時だった。尹先生と張先生は同じ師範学校の同級生で、卒業後同じ光明中学に赴任し、口喧嘩はしてもずっと仲良くしてきた。この1977年春、尹先生は心の中にきらめく陽光を感じていた。彼は教育戦線、自分の学校、担当している教育課程とクラスに対し期待に溢れていた。あらゆる不合理な事物は当然迅速に改善されるべきだと思っていた。四人組はすでにつまみ出され、四人組が教育戦線に流した害毒を一掃し、理想的教育環境を作り上げるのにあまり長い時間が必要とは思っていなかった。すべては順調に行くことを望んでいたのに、それが複雑な問題を背負いこみそうと知って、いささか頭に來ていた。だから長年の戦友の顔を見るなり言った。「なんで引き受けたんだ。墓穴を掘るようなものじゃないか。教学の質を高めるところかクラス全体をだめにするかもしれないぞ！」他の教師達も必ずしも尹先生の意見に全面的に賛成している訳ではないが、一様にじっ

と張先生の答を待った。張先生は1分間ほど考え「今さら宋宝琦を公安局に送り返すわけにはいかないし、もとの学校に戻すのもよくあるまい。クラス担任である以上、彼が来たら教育していくまで……」と答え、あわや論争になりそうだったその場の教師達も感動し、皆うなだれて自分だったらどうしただろうかと考えこんだ。

この時、3組の共産青年团支部書記謝恵敏が張先生を探してやってきた。謝恵敏は一般の男子学生より背が高く頑丈なからだつきをした娘である。見かけに反してスポーツはだめで、皆と映画を見たりその時期その時期の歌を歌ったりはするが、特に得意な趣味はないらしい。生まじめ過ぎるくらいはあるもののよい素質を持っていると思う。しかし文化大革命終結前の暗影が光明中学にも残っていて、その影響を強く受けている謝恵敏に、張先生は曰く言い難いしっくりしない感じを持っている。たとえば、青年团支部の会合の際、5人の団員のうちの2人が居眠りをしていた。けしからん、と言いつけに来たのに対し、張先生は、集会がいつも新聞を読み上げるばかりでは面白くないだろうから、つぎは山登りでも計画してみたらどうかとすすめてみても、そんなのは団の活動にはならないし、新聞を読むことの方が大切だとはねつけてしまうし、ある時猛烈にむし暑い日があって皆があえいでいるのを見て、張先生が謝恵敏にこんな暑い時に長袖長ズボンではつらいだろうから、君が率先して半袖、スカートになったら、と提案しても、彼女にはそれがブルジョア階級の悪習だとしか考えられない。半袖にスカートでいるのは級の広報委員石紅だけである。四人組が追い出されてから両者のしこりはかなり解消してきたが、まだ完全には払拭されていない。その謝恵敏がやってきて「あすから宋宝琦が本当に登校してくるのなら、女子学生は恐ろしいから皆学校には来ないことにしました」という。張先生は驚いた。このような事態は全く予想していなかった。「きみは恐いのか、きみ自身はどうすべきだと思っているの」と聞くと「恐くなんてありません。これは階級闘争ですよ。彼が悪者ならば私達は彼と闘います」「きみは大急ぎで团支部とクラス委員を呼び集めなさい。すぐ委員会を開こう」張先生は彼女にむかって真剣にいった。

委員会は終り、教室には宋宝琦を歓迎する詩を書くことになった石紅、張先生、謝恵敏が残るだけで、他の委員達は手分けして各級友の家庭を回り、宋宝琦は決してチンピラのボスではなく走り使いでしかなかったこと、彼に対し特に好奇心や怖れを抱いたり、ましてや軽蔑したりいじめたりせず皆で彼が立ち直るのを手伝うこと、女生徒のうち明日から登校しないといっている数人には、特に親に会ってはっきりと学校側は宋宝琦が女生徒に対し害を及ぼさないことを保証し、彼のようなチンピラを怖れるのは逆に彼の悪習を助長させるだけであること、皆が団結して事に当ってこそ効果があること、などを説得することにした。張先生は宋宝琦の家に行き親と話し合っ

て状況を更に的確に把握することにした。

石紅の原稿がほぼ完成し、張先生は謝恵敏との話も終り、机の上に並べてある今しがた委員達にも見せた派出所から持ち帰った宋宝琦の持物—チェーン、汚れたトランプ、ライターつきの煙草入れ、表紙が破れた本などをしまおうとした時、その本が文化大革命以前に、中国青年出版社から出版された長編小説“あぶ”であるのに気づき「あっ」と声をあげた。謝恵敏がその本をバ



ラパラとめくり、外国の男女のさし絵を見つけ「あらいいらしい！明日このエロ本を批判しなくちゃ！」といった。張先生は眉をひそめて考えこみ自分の記憶を探った。中学生の頃、青年团支部が皆に読むように推薦し、全員が夢中になって読んで話し合ったことを。「この本はエロ本なんかではない……」張先生の言葉に驚いた謝恵敏は「どうしてですか、エロ本じゃないですって、これがエロ本じゃないのならばエロ本なんてありますか」と詰め寄った。謝恵敏の心の中にはこれまでに形成された固定観念があって、書店で売られている、あるいは図書館で借りられる本以外はすべて悪書なのである。すべて四人組が流した害毒に染まった結果だ。

もしも謝恵敏の身近で親しい誰かが、張春橋や姚文元（四人組の理論家。それと江青、王洪文が四人組の構成メンバー）の多量の論文や重要文書とされているものは、決してマルクス、エンゲルス主義の権威ある著作ではないことを彼女にはっきり説明してやればどんなによかったことか。しかし彼女の両親はいつも彼女や弟妹達に毛主席の話やラジオ放送をよく聞き、新聞をまじめに読み、彼らの要求する規律を守り先生を尊敬しよく勉強するようにと言い聞かせており、このような家庭教育から受けた影響は深く、強固な無産階級的感情と労働者階級の後継者としての気質を有している。しかし資産階級や修正主義の妖怪が美女（江青らを指す）に化けてあらわれた時、素朴な無産階級的感情はたやすく彼女らの罠にはまり、盲従は利用されてしまう。

5時すぎ、張先生は宋宝琦の家を訪問した。引越し後の整理のため母親はちょうど仕事を休んで家にいた。母親の話によると父親は営林署に勤めており、退勤時間は決っていて6時には帰宅できるはずなのに、帰宅途中同僚とトランプに熱中し、8～9時にやっと帰宅するとのこと、母親の話の中から一人息子を溺愛している様子が見てとれる。そのあと本人と二人きりになっている。いろいろ質問してみると、学力は中学1年程度、すっかり資産階級 of 思想に毒されているようだ。彼の犯されている資産階級 of 思想とは？資産階級は“自由・平等・博愛”を標榜し“個人の努力”“立身出世”を重んじ、虚偽の“ヒューマニズム”で彼等の追求する搾取、圧迫を覆い隠している。宋宝琦の頭の中にはもちろん“自由・平等”思想はなく、ましてや“博愛”など考えたこともない。彼にあるのは反対に、封建時代のやくざの侠気、及び資産階級の没落段階の享楽主義といった類いの反動思想である。張先生は彼をどのように教育していったものか考えるのだった。

張先生は“あぶ”をとり出しどこで手に入れたのか訊ねた。答は学校の図書館が不良図書として鍵をかけ廃書にした中から盗み出し売ろうと思ったが、学校の印があって足がつくのを怖れて売れなかったとのこと。ほかにどんな本があったか聞くと、《紅岩》、《戦争と平和》、《辛稼軒詞選》など、もちろん彼が正確な書名を言えるはずがなく、張先生が正しい題名を教えたのである。張先生の表情を見て彼は「エロ本を見て悪かった。これからはもう見ません」という。張先生はこのチンピラと党の良い子で品行方正の謝恵敏が、同じことを言うのに驚き呆れ深く心を痛める。いずれにしろ両者とも四人組の害毒を受けた子供達なのだ。救ってやらねばならない。

宋宝琦の家庭を訪問した後、彼は通りがかりの公園に自転車を押して入り、もの思いにふける。

彼はこれまでのいかなる時よりも自分が祖国を愛しているのを感じた。彼は祖国の輝ける将来

を思った。今世紀の終わるか来世紀の始まる頃には、四つの現代化が効果を現わし素晴らしい社会が出現していることだろう。それは同時に、いかなる人も祖国を愚弄し凌辱するのを許さず、いかなる人も祖国を扼殺したり窒息させないとの強烈な感情を産み出しているだろう。彼は自分の職責を思った。人民の教師、級担任として彼が教育しているのは僅かな学生のみならず、祖国の未来であり、中華民族が960万km<sup>2</sup>の土地の上に発展し続け、世界の民族の林の中に屹立することであるのだ。

彼はこれまでのいかなる時よりも四人組を憎んだ。彼等は国民経済に危害を与えただけでなく、宋宝琦の如き畸形児や、本質は善良な謝惠敏のような子どもにまで残酷な愚民政策の烙印を押し、中華民族の現在はおろか未来までも損ったのである。

華主席を中心とする党中央により四人組は追放され、わずかな期間中に新局面が開け、親愛なる祖国は現在頼るべき保証があるのみならず、未来は更に希望に満ち溢れている。彼は宋宝琦も謝惠敏もいずれは自覚し立ち直っていくことを確信した。

公園を出かけた時、彼は尹先生に出会い自分の確信を告げて、石紅の家に赴く。石紅の家に集っていた数人の女子学生が張先生を見つけ、休校はとりやめたと報告する。最後に謝惠敏の家に近づいた時、明日は党支部にこれからは真実の毛沢東主義にもとづいて教育することを提案しよう、きっと組織の支持を得られるだろう。自分達は教学に力を入れるのみならず科学や文化の知識、徳、智、体育の全面的発展、理論と実践の結合、そのうえ学生達に更に広い世界に注目させ、人類全部の文明の成果に興味を持たせ分析能力を高めさせてこそ、社会主義革命と社会主義建設の更に強力な後継者を養成できるだろう。

この時、風が吹いて花の香りが立ちこめ満天の星が瞬いた。さながら張先生の考えを肯定し、励ますかのようであった。

1990年の時点で、班主任を読み返してみると、若書きの作品を読むような気恥かしさを感じてしまう。あの時代、文化大革命が終息し四人組が逮捕され、10年の動乱で混沌とし疲弊しきった人々がやっと一息つき、将来に希望を持てそうな予感を感じていた。文革の傷をテーマとしながら教育と祖国、党指導部にむじゃきくらい信頼を置いていたように見える教員出身の作者は、作中の張先生のいう今世紀も終わりに近づいたいま、四つの現代化の効果が現れ、世界の民族の林の中に屹立する中国民族を見ることができたであろうか。張先生と較べると1985年前後に発表された孩子王はずいぶん醒めた目で問題の本質を見抜いている。いずれにしろ四人組の流した毒害による教育路線の誤りとされているものは、四人組のみが責任を負うべき事柄ではなく、党の誤りであろう。(この項 続く) 文中の( )内は筆者

#### 引用作品

孩子王 阿 城 棋王

班主任 劉心武 1978年全国優秀短篇小説評選作品集

作家出版社 1985年11月第1版

人民文学出版社 1978年1月第1版

(平成2年10月29日 受理)